

最近、学校などでよく聞く子どもの特徴として「指示待ちの子ども」があります。「指示待ちの子ども」とは、親や先生から「～しなさい」と言われないと、自分で考えて行動に移すことができない子どものことです。

これと反対の姿を現すものとして、「自走する学習者」「自走力のある子ども」があります。もともとはベンチャー企業やIT業界などの人材育成において、マニュアルや上司の指示がなくても成果を出せる優秀な社員を指す言葉として「自走型人材」や「自走力」が使われ始めたそうで、今、学校教育でも注目され始めています。

子どもを学びの主人公に

「自走」は「自学自習(自分で勉強する)」とは少しニュアンスが違い、「自分で目的や計画を決め、困難があっても自分で軌道修正しながら行動し続ける」という、より実践的でアクティブなニュアンスを含んでいます。

学校現場における自走力教育は、従来の「先生が教壇から一方的に知識を教え込む授業」ではなく、子どもを学びの主人公にすることを目指します。

泉南市でも取り組んでいる、「自走力」を育む教育活動の一例

1 単元内自由進度学習

授業の目標やゴール、期限などを先生が提示し、子どもが「どの順番で」「誰と」「どの教材を使って」「どんな方法で」学ぶかを自分のペースで計画・実行します。



2 教えて考えさせる授業(OKJ)

最初に教師が基礎知識や見通しを教えた後、子どもが自ら考えないといけない応用・発展課題(ジャンプ問題)に挑み、習った内容を子ども同士で教え合って理解を確かめます。



3 探究学習・総合的な学習

地域社会や日常の疑問から、子ども自身が「問い(テーマ)」を設定し、自ら調べたり、外部の人と関わったりしながら解決策を模索します。



4 デジタルの活用

タブレットや様々なデジタルソフト等を活用し、自分の考えを可視化したり、友達と見比べたりしながら、自分の学びや考えをブラッシュアップします。



学校教育で自走力を育てるメリット

「なぜ学ぶのか」の**内発的動機**が育つ
人から強制される勉強ではなくなるため、学習への意欲が高まります。

変化の激しい社会を**生き抜く力**になる
答えのない時代において、自分で考えて道を切り拓くキャリアの基礎になります。

大人がすべて先回りしないことも大切です

子どもが困っていると、つい大人がすぐに答えを教えたり、代わりにやってあげたりしたくなります。

しかし、少し待つことで、子ども自身が考える時間をつくることができます。

例えば、忘れ物に気付いたときにすぐ届けるのではなく、多少困ったとしてもあとで「どうしたら次は忘れにくくなるかな?」と一緒に考える。宿題で手が止まったときにすぐ答えを伝えるのではなく、「どこまでは分かる?」と尋ねる。こうした関わりが、自分で解決する経験につながります。

家庭でできる4つの取組

🕒 明日の準備を自分で考える。時間割や持ち物を確認し、必要なものを準備する。

🕒 家の仕事を任せてみる。洗濯物をたたむ、食器を運ぶ、植物に水をやるなど、年齢に合った役割を持つ。

🕒 選ぶ機会をつくる。「どちらがいい?」と選択肢を示し、自分で決める経験を増やす。

🕒 振り返る時間をつくる。「できたこと」「工夫したこと」「次にやってみたいこと」を話す。

こんな声かけを

- ☺ 「どうしたらできそうかな?」
- ☺ 「まず、どこから始めてみる?」
- ☺ 「自分で考えた方法を教えてくれる?」
- ☺ 「困ったときは、誰に相談できそうかな?」
- ☺ 「うまくいかなかったけれど、次はどうしてみよう?」



すべてを子どもに任せる必要はありません。子どもの様子を見ながら、大人の支えを少しずつ減らし、「自分でできた!」を増やしていきましょう。

一人ひとりのよさや可能性を大切に、学校・家庭・地域で子どもの成長を応援していきましょう。



泉南市教育委員会 教育部 学力向上対策室
〒590-0505 大阪府泉南市信達大苗代 374-4
TEL: 072 (483) 3673

花笑み
sennan